

国際交流活動と英語活動の関連した学びでの子どもの変容

辻 伸幸

本研究では、中学年からの英語活動を展開する上で、国際交流活動と密接に関連させて学習し子どもたちの学びの質の高まり（児童の変容）を保証することが可能であることを明らかにする。

まず新学習指導要領に示されている、英語活動の目標となるコミュニケーション力の素地を養う3本柱には、「言語や文化についての体験的な理解」、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」、「外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」が挙げられている。この3つを網羅し、海外の小学校へビデオレターを送るプロジェクト型学習を行った。上記の関連学習を総合的な学習の時間を十分に関連させ、子ども達の学びの質を保証することを実証した。

キーワード：総合的な学習、国際交流活動、英語活動、プロジェクト型学習

1. 研究目的

本研究は、総合的な学習の時間の枠組みの中で、英語活動を国際交流活動と密接に関連させて、コミュニケーション力の素地を養うことで学びの質の高まりを明らかにすることである。

本校における総合的な学習の時間「そうごう」の研究テーマは、「学び続ける子どもを育てる。（“ほんまもん”体験を通した学びを伝え合う活動を通して）」である。英語活動における“ほんまもん”体験とは英語を使った必然性のあるコミュニケーション活動である。そこでスカイ小学校の友達と、自分たちのことを伝え合う活動を行った。

「そうごう」では、「学びの質の高まり」を学んでいく過程において、子どもたち自らが乗り越えるべき壁を設定することができたときにおこると捉えている。英語活動においては、日本語とは異なる言語を扱うという条件から、子どもたち自ら乗り越えるべき壁を設定することが難しいことが多い。しかし、小グループに分かれて自分たちで伝えたいことを考え出し、準備し、国際交流活動を行うプロジェクト型学習を導入することで、学びの質を高められると考えている。

新学習指導要領で、中学年において英語活動を実施することは、学校裁量の時間を使わないといけないが、国際交流活動は、総合的な学習の時間で取り扱うことが可能であり、高学年の英語活動につながる貴重な学びであると考えている。

2. 研究方法

1年間を通して、3年生の児童達に国際交流活動と英語活動を密接に関連させたプロジェクト型学習に取り組ませる。本論文では、附属小学校3年生B組児童38名による2008年5月から12月までの活動を取り上げる。

コミュニケーション力の素地づくりで、文部科学省(2008)が示している「言語や文化についての体験的な理解」、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」、「外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」の3点に焦点を当てることにする。

国際交流活動は、具体的に、オーストラリア・ビクトリア州立小学校のスカイ小学校の児童たちと、ビデオレター、絵手紙、工作などを交換して交流を重ねた。8月には、担任が現地の学校を訪問し、交流授業を実施した。スカイ小学校とは、国際交流活動を2006年から学年は違いが行っている(辻, 2008a, 2008b)。オーストラリアは、小学校から外国語教育が盛んで、多言語教育として有名である(Clyne, 1995)。日本語を採用している学校も多く、スカイ小学校では、日本人の専科教員が日本語を教えている。

児童の変容を見取る方法として、授業のビデオ、児童の感想やアンケート、振り返りカードを分析し成果と課題に結びつける。また、2008年11月1日に、附属小学校教育研究発表会で行った英語活動の研究授業と研究協議会での指導助言の和歌山大学・江利川春雄教授や他の参加者の示唆も反映する。

3. 国際交流活動と英語活動を関連させた単元

3. 1 国際交流活動の展開

国際交流活動では、5月に個人的な交流相手（以後、バディと呼ぶ）を決めて、自己紹介を含めた絵手紙（写真1）を交換した。絵手紙には、バディの顔が分かるように顔写真を貼った。絵手紙と共に、日本の文化を代表



写真1 絵手紙

する折り紙も児童達が作成して送った。

6月と7月には、自分たちのことを簡単な英語を用いて伝えるため、最初のビデオレターを作るプロジェクトに取り組んだ。ビデオレターは、9つの小グループ（1グループ、3人か4人）に分かれて、伝える内容を考えさせた。3年生という発達段階を考慮して、一人が使う英文は一文（例：We eat school lunch.）ぐらいにとどめた。児童達は伝える内容として給食、フラフープ、歌とマジック、漢字クイズ、漫画、じゃんけん、日本語クイズ、遊具を選んだ。簡単な英語で紹介するとともに、実物、絵、写真、実演など非言語面での伝達手段を利用することができた。プロジェクターとビデオカメラを使用して、自分たちがどのようにビデオレターで映し出されるのか確認しながら、各グループが練習できるように配慮した。

8月には、担任が現地のスカイ小学校を訪れビデオレターをバディたちに見せながら国際交流活動の授業を実施した(写真2,3)。

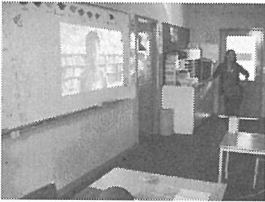


写真2 国際交流活動授業



写真3 国際交流活動授業

ビデオを単純に受動的に見せるのではなく、クイズやじゃんけん挑戦できるように再生を調整したり、補足説明や質疑応答など組み込んだりした。どのようにビデオレターがバディに伝わっているのかをビデオで撮影した。

9月に、スカイ小学校で撮影したビデオを見た。児童達は、自分たちの考えていたことが、きちんと伝わったのだと自信をもつことができた。

10月から11月に、自分たちのことについて、さらに知らせようと、2回目のビデオレターを作成するプロジェクトを行った。今回は、乗り越えるべき壁を難しく設定した。難度が高くなっても、1回目の経験を生かして、プロジェクトを達成することが可能であり、学びの質が高まると考えたからである。

具体的に、難度を高めるために、次の二つを加えた。一つは、非言語面で伝達するための工夫を第1回目よりこらすことである。日本人ではないオーストラリアの同年代のバディであり、日本語や日本文化を毎週1時間学んでいるバディをしっかりと意識して、何を伝えたいのか熟考することを指導者は要求した。また、思いやりの心をもって、適切な声の大きさや速さで、相手に見えやすくビデオレターに映るように注意させた。2回目のビデオレターも、小グループで内容とどのように工夫して伝えるのかを考え、練習を重ねた(写真4,5)。今回は、他のグループの練習を見て、アドバイスを

を活用して助言を行う試みも実施した。各グループが考えた内容は、乗り物、教科、季節、オリンピック、漢字クイズ、独楽、日本の文化、日本の遊びである。



写真4 ビデオレターの練習



写真5 ビデオレターの練習

今回もビデオレターにおいて、プロジェクターとビデオカメラを使用して、自分たちの姿を確認しながらもっとよく伝わるように改良を重ねた。

それぞれのグループの完成度が高まったところで、ビデオレターの試作版を作り、学級全員で見て、さらに改善できそうなところを練習し、最終版を作成した。

12月には、バディのためにクリスマスカードを作り2回目のビデオレターと一緒に郵送した。1月には、スカイ小学校から、年賀状が送られる予定である。また、ビデオレターの返信も計画されている。

3. 2 英語活動の展開

3. 2. 1 英語活動の役割

3年B組の児童達は、英語活動の時間を週に1時間受けてきている。指導形態では、担任単独の授業と担任とネイティブスピーカー講師によるティーム・ティーチングの二つがある。担任とネイティブスピーカー講師によるティーム・ティーチングでは、TPR（言語活動と全身動作とを連合させることによって目標言語を定着させようとするもの；白畑、富田、村野井、若林、1999）を中心とする英語に慣れ親しむ活動を児童達は受けてきている。スカイ小学校のバディに送るビデオレターによるプロジェクト型学習の単元は、担任単独の授業で行ってきたので、ここでは、担任単独指導による英語活動を取り上げる。

英語活動の目的は二つある。一つは、ビデオレターで使う英語の語彙や表現に慣れ親しむことである。もう一つは、各グループで練習してきたビデオレターの内容を伝えようとする事である。

3. 2. 2 英語に慣れ親しむ活動

各小グループが考えた内容から担任が、ビデオレターで使う適切な英語の語彙や表現を選んだ。ネイティブスピーカーの講師に英文をチェックしてもらった。それらに慣れ親しむ活動を発達段階に合わせて楽しくできるように多様な方法で導入した。以下に具体的な活動を挙げる。

【クイズを使った活動】

三択クイズにして、授業のウォームアップの場面で使用した。児童達は、無理に英語で答える必要がないので、すべての者が楽しめた。また、ビデオレターの中で、あるグループは、漢字クイズを扱っているの、その模範を示すこともできた。例えば、「薔薇」という言葉を大きなカードで示し、“What's this?”と訪ねる。次に、“A: It's a pig. B: It's a book. C: It's a rose.”と三択を出す。児童達は、「薔薇」という漢字を知らない者がほとんどである。全員にどれが答えなのか考えさせてから解答を言った。ある児童が、「バラは植物だからくさかんむりがつくんだな。」と呟いていた。子どもの変容として日本語に対する言葉への気づきに発展することが分かった。

【絵カードを使った活動】

絵カードは、語彙や表現をまず、聞くことに焦点を当てて、慣れさせることができる優れた教材である。ビデオレターで聞いたり話したりする語彙や表現を絵や画像で確認することが、理解に役立つのである。担任の発音を聞いた後、そのカードにすばやく触れる活動やかるた取りゲームに使った。子どもたちは、知らず知らずのうちに、英語の表現に慣れ親しむことができていた。

【ゲームを使った活動】

ゲームも、児童達には、人気の高い活動で、英語に慣れ親しむことができる有効な活動である。児童達は、訓練的、強制的な慣れる活動は、好まない。楽しく、夢中になるゲームを使って、知らず知らずのうちにビデオレターで使う英語の語彙や表現に慣れ親しむことができていけば理想的である。英語嫌いをつくる可能性が、極端に低くなる利点もある。

英語活動の批判として、楽しくゲームで英語に触れているだけでは、英語活動の目標に迫ることができないと、よく指摘される。あくまでも、指導者側にゲームをする目的は何なのかをしっかりと持つことが重要である。

使ったゲームは、ビンゴゲーム、伝言ゲーム、想像ゲームである。ビンゴゲームはビンゴシートに関連する語彙の好きな画像を4×4の16マスの好きなところへ事前に貼っておく。16の封筒に語彙の画像を入れておき、児童が一つ選び、中に入っている画像を発表する。自分のシートの同じ画像に印を付け、縦横斜めのいずれかの列の画像にすべて印が付けばゴールとなる。伝言ゲームは、英語の表現を縦に一列に並んだ友だちに伝えていくゲームである。ゲームをさらに面白くするために、紙の筒を使って小さな声で呟くように伝えていった。想像ゲームは、教室の児童の机の上に画像を一枚ずつ置く。十カウントダウンする内に、児童達が、一枚の画像を決めて指で触れておく。ビンゴで行ったように一枚の封筒を児童に選ばせ、その画像と同じ画像に触

ている児童は、アウトとなり自分の席に戻るというゲームである。ここでも、楽しく活動する中で、必要な表現に慣れ親しむという変容が見られた。

【チャンツを使った活動】

チャンツは、リズムに合わせて繰り返し発音する活動で、聞いて慣れ親しんできた語彙や表現を発音することに慣れさせる活動に有効である。リズムをとるためにメトロノームを用いた。メトロノームのテンポに変化をつけることで、単調な発音練習から脱却することができ効果的であった。児童達は、リズムを速めていくと、どんどんその速さについていこうとした。また、急に遅いリズムにすると、ゆっくり発音することができ、細かいところまで練習することができた。

この活動を行う中で、英語の音への正確さが増すことが明らかになった。

【パソコンを使った活動】

サーバーに各グループの英語表現の音声を保存しておき、一人一台のパソコンでヘッドフォンを使って、英語を聞いたり言ったりする練習を行った(写真6)。



写真6 パソコンを使った活動

個人のペースに合った活動で、さらに表現に慣れ親しむ変容が見られた。

3. 3 総合的な学習との関連

ビデオレターを作るための内容を考えたり、小道具を作ったりすることに総合的な学習の時間を関連させることができた。また、ビデオレターで自分たちのことを伝える以上、相手のこともできる限り理解できるようにしたいと考え、オーストラリア学習も取り組んだ。これは、豪日交流基金が無償で貸し出してくれるオーストラリア体験セット(<http://www.ajf.australia.or.jp/studyaus/eakit/senior.html#naiyo>)を使用した(写真7,8)。セットには、動物パペットや写真カードや制服などの実物が入っており、実際に見たり、さわったり、試したりすることができる優れた教材である。

子どもたちは、オーストラリアと言えば、コアラやカンガルーと言ったステレオタイプ化された印象をもっていた。それが、この学習を終えて、オーストラリアには、様々な民族の人々が暮らしており、アボリジニの人々の文化を大切にしていることなどが理解できた。



写真7 オーストラリア
体験セット



写真8 オーストラリア
体験セット

4. 考察

国際交流活動であるスカイ小学校へ自分たちのことを伝えるビデオレタープロジェクトは、ほぼ達成することができた。振り返りカードから、ほとんどの者がビデオレターで伝わったことに満足感を表していることからプロジェクトの達成度は高く児童達の変容が見られる。児童達は、今まで、海外の小学校に同年代の交流相手をもったことがなかったが、今は、バディが一人ひとりいて、ビデオレターで自分たちのことについてしっかりと伝えることができた。担任が現地の小学校で直接、確認することができた。このことは、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成へとつながる部分であると考えられる。児童のアンケートでは、スカイ小学校との国際交流活動について 87%の者が、楽しいと答えており満足度は高いと言える。しかし、13%の児童については、楽しくないと回答している。

「外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」という点では、プロジェクトが達成できたことから十分な慣れ親しむ段階まで進むことができ、その点での変容が明らかである。また、ビデオレターのできあがりを検証して、その達成度の高さからも証明できる。さらに、児童達のアンケートから担任単独の英語活動の授業について満足度はとても高く、1人を除く37名が好きと回答している。

「言語や文化についての体験的な理解」の面では、特に、オーストラリア体験セットでの学習により、目標に迫ることができたと考えている。自分たちが関わっている国だからこそ、この教材で、児童達の体験的な理解が深めることができた。さらに、自分たちの国である日本の言葉や文化についても、ビデオレターで扱うことができたので、考えたり、感じたり、理解したりすることができたと考えられる。

5. 成果と課題

外国語活動(実質は英語活動)が、2011年度から全公立小学校の高学年に年間35コマが必修となる。しかも、今まで展開されてきていた総合的な学習の枠組みから外れ、独立した領域となる。従って、今後、高学年以外で、英語活動を指導することが難しくなってくる。総合的

な学習で、英語に慣れ親しむための活動ができなくなる。言い換えれば、英語を使った歌やゲーム、チャンツなどは、取り扱うことができない。これらは、総合的な学習の時間の目標である「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。」という趣旨に合わないからである。

英語活動の教育内容と総合的な学習の時間の教育内容との間で、矛盾していたものが混在していたという面からは、新学習指導要領によって問題が解消されると言えよう。しかし、総合的な学習の中で英語活動の内容が徐々に豊かになってきたとも言える。

本研究で取り上げた関連学習では、「言語や文化についての体験的な理解」、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」、「外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」の全てにおいて、児童達が超えなければならぬ壁を設定することができ、プロジェクトを達成するという目標に近づく過程に学びの質の高まりがあった。新学習指導要領で中学年が英語活動を展開するときの示唆が、本研究から得ることができた。さらに、高学年で、発達段階に合致した国際交流活動へ進めるための前段階への理解につながったと考えられる。ただ、国際交流活動で、13%の児童が楽しくないとアンケートで回答している。その理由として、英語の発音の難しさや、発表を苦手とすることなどが考えられる。今後、詳しく否定的な要因を特定していかなければならない。

参考文献

- 文部科学省. 2008. 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』. 東洋館出版
- Clyne, M. et al. 1995. Developing second language from primary school: models and outcome. ACT: National Language and Literacy Institute of Australia Limited.
- 白畑知彦, 富田雄一, 村野井仁, 若林茂則. 1999. 『英語教育用語辞典』. 大修館書店
- 辻伸幸. 2008a. 「オーストラリア・ビクトリア州スカイ小学校の訪問を終えて」. 『和歌山大学国際教育研究センター年報第4号』
- 辻伸幸. 2008b. 「英語嫌いを生み出さないためには」. 『小学生に英語を教えるとは?』. 河原俊昭編. めこん